令和３年度　教員地域貢献活動支援事業（学長裁量事業）
協働型　成果報告書

下記研究課題について、以下のとおり成果を報告します。また、当該事業の経費執行については、規程等を遵守し適正に使用しました。

１　研究課題名

「まち保育」の観点から取り組む保育・教育施設の共助構築に向けた検討・実践

２　研究代表者

氏名	三輪律江
所属	国際教養学部
職位	教授

３　事業ユニットの構成

氏名・所属・職位	―

４　相手先

組織名	横浜市神奈川区こども家庭支援課

※連携相手先以外で、本事業に協力・参画した機関等

組織名	まち保育研究会、稲垣景子（横浜国立大学准教授）、萌文社、大川印刷

５　この研究活動の概要（現状と課題）

幼児期の子どもたちが家族と離れ過ごす保育・教育施設が、非常時の対策に取り組むためには、日常的な地域との関係づくりが不可欠である。日常業務に追われる中、施設自らが無理のない範囲で地域との関係を構築していくための意識啓発、地域とともに園児・保護者を巻き込んでいける体制づくりや手法論を検討、実践する。

６　課題解決の方法

神奈川区では、2018 年度「保育・教育施設防災対策検討会」を立ち上げ、保育・教育施設が自助・共助の視点で防災対策に取り組むための方策を検討し、「保育・教育施設向け＋αの防災ガイド」などの策定を図ってきた。しかし、そもそもの保育・教育施設と地域（自治会・町内会・企業など）との関係性が十分に構築されておらず、結果的に地域と連携した防災対策が行われていないということが課題の一つとして明らかになってきた。

一方で、日常業務に追われる保育・教育施設のスタッフが地域との連携を進めることは容易くない。連携すべき地域とは誰を指すのかといった地域のステークホルダの理解、地域との連携がなぜ必要かといった動機付け、どのようにすれば進められるのかなど、施設自らが無理のない範囲で地域との関係を構築していくための意識啓発、地域とともに園児・保護者を巻き込んでいける体制づくりや、施設自らができる手法論を検討していくことが求められる。

事業代表者である三輪は、保育・子育て支援実践者、建築計画、都市計画、環境工学、防災、臨床心理学といった多様なメンバーと共に、特に乳幼児期の子ども達が親元を離れて集まる「保育施設」に注目し、乳幼児の子どもが地域に見守られながら育っていくための挑戦として「まち保育」という新しい概念を提示し、まちと保育を取り巻く課題解決の糸口について、青葉区の保育所と共に『保育所×地域つながり力アップマップワークショップ』という実践を重ね、効果を確認してきた（『まち保育のススメ（萌文社、2017.5)』)。そして、まち保育の試みを通じた地域とつながる糸口、“防災”と“共助”の接点の拡がりについての効果も示唆を得てきた。

そこで、本事業ではこれらの実績から、

① 「まち保育を通した保育・教育施設の地域連携の在り方勉強会」の開催

② ①の拡大版として、施設自らができること、やりたいことについて話合う「まち保育の理解を踏まえた共助力強化ワークショップ」の開催

③ 区内の施設への定期的な伴走支援

をサイクルとして行うことで、身の丈にあった手法を施設自らが検討し、身の丈にあった防災・共助の手法として、日常的な地域連携の中でジブンゴトとしていく方法を検討する。またこれらを普及コンテンツとなるような記録媒体として作成する。

7　実施した内容（スケジュールと具体的な活動、実績、成果）

2021 年度は最終年度として研修会と区内の施設への定期的な伴走支援を行った。

① 神奈川区内の保育・教育施設の合同園長会の日時に合わせ、『「まち保育」の理解と防災力強化　連続講座～保育・教育施設の地域連携の在り方を考える～』の研修会を実施した。年 2 回開催。対面とオンラインの両会場で実施した。

＜第 6 回＞2021 年 10 月 15 日（金）14：00～15：30 コロナ禍の防災対策について

神奈川区総務課　防災担当より、防災関係のマップ紹介。その後、コロナ禍の防災対策や地域連携について、グループディスカッションを通じて、施設の状況と課題を近隣エリア内で共有。

合計 50 名参加。

＜第 7 回＞2022 年 2 月 16 日(水）14：00～15：00　　3 年間の振り返り

これまでの総括と改めて「まち保育」からの理解と共助力向上に向けた講義。合計 19 名参加。

② 区内施設への定期的な伴走支援として、いずみ反町保育園は 2021 年度をもって自身で活動を進めていくということで一区切りをつけたため、2021 年度は以下の実践サポートを行った。

【白幡幼稚園】延期になっていた園児のおさんぽワークショップを 2022 年 3 月 31 日に実施した。

参加者：白幡幼稚園の年長児約 20 名および教職員 8 名、神奈川区こども家庭支援課 4 名、三輪および学生 3 名

【幸ヶ谷小防災拠点エリア】2020 年度の調整、横のつながりの強化として“顔の見える関係づくり”として幼保・子育て支援施設の職員同士の顔合わせとヒアリングを経て、2022 年 3 月 5 日（土）17 時 30 分～18 時、神奈川地区センターにて意見交換会を開催した。

参加者：幸ヶ谷小学校地域防災拠点の関係者 5 名、近隣幼保・子育て支援施設 5 施設、神奈川区こども家庭支援課 4 名、神奈川区総務課防災担当 2 名、稲垣先生、三輪および学生 2 名

③ 各施設での防災や地域との繋がりに関して、現在できていること、あまりできていないことなどを、それぞれの施設で定期的に自己点検し次のステップの見える化と状況を俯瞰する「自己点検シート」の回答結果を踏まえ、『神奈川区防災・ 減災×まち保育カルテ』を作成し配布した（回答を得た 43 施設)。

＜カルテの構成＞

1 頁目　貴施設の周辺ハザードや周辺理解のための地図

2 頁目　『いつもお世話になっている方やお店等の場所をリストにしておきましょう』メモ

3 頁目　自己点検アンケート評価からのフィードバック

主な視点（1）助言：これも大事です！（●がついていた項目）

（2）助言：まずは職員から始めてみてはどうでしょうか？

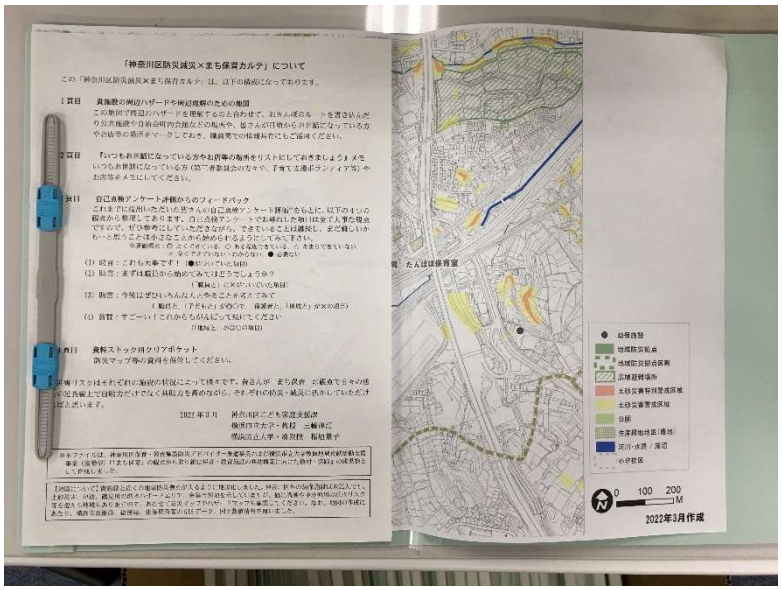
（3）助言：今後はぜひいろんな人とやることを考えてみて

（「職員と」「子どもと」が◎〇で、「保護者と」「地域と」が✕の項目）

（4）賞賛：すごーい！これからもがんばって続けてください

（「地域と」が◎〇の項目）

4 頁目　資料ストック用クリアポケット



④ プロジェクトの集大成として、子どもたちと保育・教育施設の職員と学生、その他関係者とともに、日常の活動の延長線上で、まちの資源と活用方法を防災・減災の視点を交えて学ぶことができ、汎用性のある教材として絵合わせカード「てくてくまっち」を開発、制作した。

8　この研究により得られた効果と自己評価

・これまでの全体研修を経て、各園ではお散歩マップの見直し、地元の防災組織の会合への参加、防災訓練などへの参加等、小さなアクションが実施されていたことが改めて確認でき、大事なキーワードとして（1）自身の施設の状況を正確に理解すること、（2）近助・共助のために地域との連携や施

設間の連携を進めること、（３）そのためにはまずは地域を知ること、知り合うこと、そして繋がること、それは普段の活動を通してできるはず、の 3 点を教示することができた。
・具体的なリスクの理解とそのためのガイドラインを園へのメッセージとして個別に「カルテ」として教示することができた。
・保育スタッフと共に、乳児期からまちを知るコンテンツづくりとして『てくてくまっち』の開発に挑み、クオリティの高い製品として多様な主体と連携した協働事業の集大成としてまとめ、発信することができた。
・本学の学生が、上記の研修会と伴奏支援、『てくてくまっち』の開発に学外関係者とともに関与し、大きな教育的効果が得られた。

9　今後の課題と展開

『てくてくまっち』は、つくって終わりではなく、その後の遊び方の工夫、活用やカスタマイズの仕方など、更新しながらアップデートしていくことが可能なものであるため、その後の利用についてアンケート等を取りながら、乳幼児期からまちを知り正しく恐れることを学ぶ汎用性のある媒体となっていくことを期待したい。

10　本事業に関する研究発表、メディア掲載（予定を含む）

・NHK 首都圏ニュース放映　1 回
・YOU テレビ放映　2 回
・タウンニュース掲載　2 回
・プレス発表
・大学広報
・大川印刷 YouTube 配信（予定）
・こども環境学会 2022 年度全国大会（東京）ポスター発表予定（2022.7 月）
・地域安全学会 2022 年度発表予定（2022 年 5 月）および技術賞応募予定